音 楽 科

圓城寺佐知子・嶋津瑠依子・松前良昌

Ⅰ　研究の経緯

１　昨年度までの研究

本校では，「小・中学校９年間の学びがつながる授業づくりのあり方」というテーマのもとで，小学校から中学校への学びや育ちの円滑な移行という課題に応え，子どもたちの学びの質が高まるためにどのような授業づくりを進めるのかを研究をしている。ここで言う「学び」とは生涯通して行われるものと捉え，学びの連続性を重視している。これは音楽科の目標である「音楽によって生活を明るく豊かなものにする態度を育てる」（学習指導要領中学校１学年），「生涯にわたって音楽に親しんでいく態度を育てる」（学習指導要領中学校２・３学年）とも通じている。そして，小学校５・６学年および中学校１学年であるⅡ期（本校研究主題参照）においては，いわゆる中１ギャップの軽減も含めた授業展開に焦点をあてて研究を推進することにした。また，中学校２・３学年であるⅢ期においては，「概念の深化をめざした授業構成と教材の工夫」に焦点をあて，思考力・判断力・表現力といった高次の学力を育成する授業づくりというテーマで研究を推進している。

音楽科で学習したことを社会や生活に直接的に活かすことができたと実感するのは容易ではない。しかし，そのことは生涯にわたって豊かに人生を送るうえで有意義なことである。だからこそ，よりよい表現を求め，自分の思いが表現できたと感じさせることが不可欠と考えている。その基本的要件として音楽的技能を身につけることは重要である。

Phillips（吉富ほか訳，2007）は，「優れた歌唱のための基礎的なスキルが思春期以前に確立されていなかったら，声の開発に関する教育プログラムを第７学年（およそ中学１年）で始めるべきである。」と述べている。したがって，短時間で効果的に技能が向上する指導法を開発すれば，授業時間数が少ない中で，音楽的技能を用いてよりよい表現ができたとの実感や達成感をより多くもたせることが出来ると考えられる。

そこで，本校音楽科においては，表現分野における高次の学力を育成する授業づくりに着目し，さらに基礎的な音楽技能を身につけさせることに視点をおいて，Ⅰ期・Ⅱ期・Ⅲ期それぞれの段階に通ずる授業構成と教材の工夫について，基礎研究をすすめることとした。具体的には、児童・生徒一人ひとりが自分の思いや意図を深め，音楽で表現することができる生徒の育成をめざし，実践的研究を行った。その結果，昨年度の研究授業では次のような成果を得ることが出来た。

・小学校２年生において、授業の導入で、毎時間、リズム打ちをしたり即興的にリズムをつくったりする音遊びを取り入れることをパターン化し、拍の流れにのる感覚や音楽の仕組みを学ぶ活動を積み重ねたことによって、音楽をつくるというイメージを児童がもつことができ、リズムを即興的につくったり友達とリズムをつないで音楽にする活動に抵抗なく取り組むことができた。

・小学校２年生において、音楽をつくった時の課題として、つくった音楽の記録をいつ、どのようするかということがあったが、つくりながら記録するのではなく、完成した後に記録をした。このことによって、音を聴きながらつくることに集中することができた。また、記録にはホワイトボードや付箋を使うことで、つくった後でも変更が容易にできた。

・小学校５年生において、自分たちがつくる音楽に関係している曲を鑑賞することによって、めざす

音楽の具体的なイメージを児童がもつことができ、活動の意欲が高まった。

・中学校２年生において、１年生で自分たちで今後運営ができるようにあらゆる練習方法を身につけたことが自分たちのアイテムになり、生徒が自律している。生徒はお互いに客観的な意見を述べるとともに、指揮がわかりづらい箇所を指摘したり，伴奏者は音程が下がったら的確に１音弾くなど，美的な価値判断ができていた。

一方で、次のような課題もあった。

・自分の思いや意図をもたせるためには、いろいろな種類の音楽に触れる機会をもつことが大切である。

・生活の様々な場面で音楽に親しんでいる低学年の時期から、音楽の仕組みを楽しみながら学ぶ活動を積み上げることで、自分の思いや意図を音楽で表現する方法を身に付けていくと考えられるため、音楽の仕組みを学ぶ具体的な活動を発達段階に応じて考える必要がある。

そして、これらの結果から、以下の２点を改めて認識することができた。

・発問や助言の内容，そのタイミングや抽象度などには，発達段階に応じて違いがあること。

・自分の思いや意図を演奏に生かすための音楽的技能を始めとする手段を，児童生徒に身に付けさせることの重要性。

２　今年度の研究

今年度は、研究内容を表現領域の中でも歌唱表現に焦点化して、小・中学校の学びがつながる授業のあり方を探る。

本校音楽科では、低学年から音楽活動を重視し，活動を通して，自分の思いや意図を演奏に表す方法を一つひとつ身に付けさせることが重要であると考えている。学年が進むにつれて，身に付けた表現方法を選択し活用できる児童・生徒を育てるために，指導者が適切な場面で適切な支援を行うことができるようにしたい。また、音楽的技能などを曲のどの部分でどのように利用するかを自ら判断し，表現に生かすことができるようにしていきたい。さらには、効果的に音楽的技能などが向上する指導法の開発を試み，その有効性について研究していきたいと考えている。

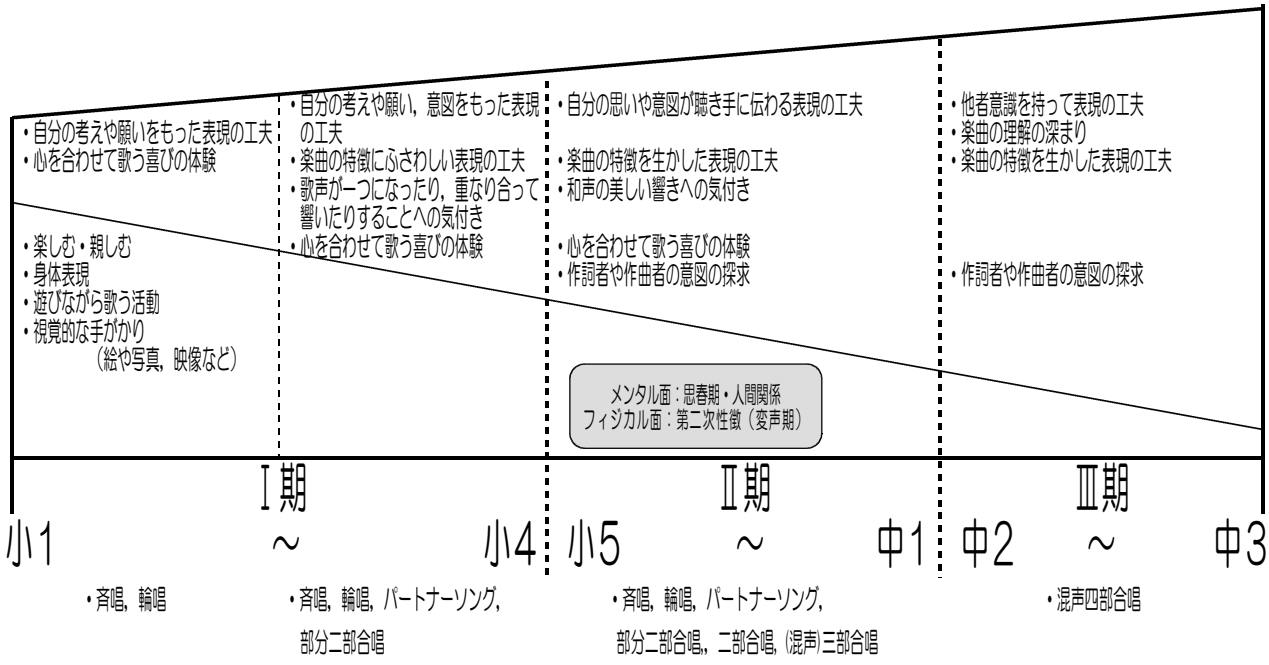

図1　音楽表現でめざす学び文化（歌唱表現の場合）

よりよい合唱表現を求めていくための基本的要件として，音楽的技能を身につけることが重要となってくる。いくら自分の思いや高い目標をもったとしても，それを表すための音楽的技能がなければ，表現の広がりや深まりは期待できない。生徒自身には手応えが感じられず，向上心の高まりも期待できない。したがって，Ⅱ期では何のために音楽的技能を身につけようとしているのかを理解させるとともに，その音楽的技能を用いてよりよい表現ができたとの実感や達成感をもたせる必要があると考えられる。また，Ⅲ期では，身につけた音楽的技能を曲のどの部分でどう利用するかを自ら考え，判断し，表現に活かすことができるようにしていくことが必要と考えられる。ただし，そのことは音楽的技能を身につけることに偏重することを意味していない。必要なのは，年間カリキュラム上からも限られた時間で効果的に音楽的技能が向上する指導法の開発であると考えている。

３　中学卒業時のめざす生徒像に向けた授業仮説

一人一人が自分の思いや意図を深め，音楽で表現することができる生徒

＝より豊かに表現しようとすることに関心があり，意欲的に活動する

＝作品に込められた作詩・作曲者の思いをくみ取り，自分なりに解釈している

＝より豊かに表現するための音楽的技能を身につけている

＝音楽的技能をどう活かすかを自ら考え，判断し，表現に活かしている

上記をめざす生徒像に向けて、以下の授業仮説を設定した。本研究では、特に「歌唱表現」に焦点を当てている。

Ⅰ期前期（小学校１～２年生）

Ⅰ期前期の児童は，音楽に合わせて体を揺らしたり、身の回りの音に興味をもって鳴らしたりして生活の様々な場面で音楽に親しんでいる。そこで、自分の体や身の回りの音、楽器などを使って音遊びを楽しんだり、音遊びで体験したことをもとに、簡単な音楽をつくる活動を積み重ねたりすることによって、「音楽づくり」のための基盤を養い、思いをもって表現することができるのではないだろうか。

Ⅰ期後期（小学校３～４年生）

Ⅰ期後期の児童は，いろいろな音の響きやその組み合わせを楽しみ，様々な発想をもって即興的に表現しようとする時期である。音楽の始め方や終わり方を意識したり，言葉をリズムにのせて反復したり組み合わせたりする活動を通して，自分の思いや意図をもって表現の工夫をしようとする意欲が高められるのではないだろうか。

Ⅱ期（小学校５年生～中学校１年生）

Ⅱ期の児童・生徒は，これまでの音楽経験で得た音楽表現など，いろいろな音楽表現から発想を得て，即興的に表現しようとする時期である。互いの表現を聴き合いながら，選んだ音階を用いて旋律をつくったり，リズムパターンを重ねたりする活動を通して，見通しをもってよりよい表現を目指す意欲が高められるのではないだろうか。

Ⅲ期（中学校２～３年生）

Ⅲ期の生徒は，楽曲の理解を深め，曲想を活かした表現を考えることが出来るようになってくる時期である。そのため，歌唱指導においては，生徒の状況に応じた指導によって、歌詞の意味や内容，

曲想，音楽を形づくっている要素を根拠として，身につけた音楽的技能を作品のどの部分でどう利用するかを自ら思考・判断しながら，自分の思いや意図を聴き手に伝えるような豊かな表現ができるのではないだろうか。

Ⅱ　本年度の研究計画

１　研究の目的

Ⅰ期，Ⅱ期，Ⅲ期それぞれにおいて，上記の仮説に基づく授業を行うことで，中学校卒業時には思考力・判断力・表現力のような高次の学力をもとに「一人一人が自分の思いや意図を音楽で表現することができる生徒」になるのではないかと考え、研究を推進していく。

Ⅰ期では、音楽的な約束事を決めた音遊びやそれをもとにして簡単な音楽をつくる活動を積み重ねていくことで,「音楽づくり」のための基盤を養い、思いをもって表現することができるのではないかという授業仮説を検証する。

Ⅱ期では、音楽を特徴付けている要素や音楽の仕組みを選んだり組み合わせたりする活動に取り組むことで，自分の思いや意図を明確にし，工夫しようとする意欲が高められるのではないかという授業仮説を検証する。

Ⅲ期では、歌唱の授業において，比喩的表現を用いた指導が，正確な音程の感覚や楽曲に適した発声法などの音楽的技能を高めるのではないかという授業仮説を検証する。

２　研究の方法

（１）以下の検証授業を実施し、授業前後の児童・生徒にアンケート調査を実施したり、演奏を分析したりすることによって、授業仮説を検証する。

①Ⅰ期　小学校２年

題材名「ようすをおもいうかべよう」

友達とかかわりながら、リズムをつくったりリズムパターンを組み合わせを工夫したりして、リズムの音楽をつくる。

②Ⅱ期　小学校５年

題材名「ようすをおもいうかべよう」

見通しをもってリズムパターンを組み合わせ，リズムの特徴に合った楽器を選択し，自分の思いや意図を打楽器アンサンブルで表現させる。

③Ⅲ期　中学校３年

題材名「合唱表現を工夫しよう」

歌唱指導において，比喩的表現を用いて指導することにより，効果的に音楽的技能を高め，その技能をもとに，楽曲に対する自分の思いや意図を豊かに表現させる。

（２）検証方法

授業内容や児童・生徒の実態に応じて、次のいずれかを実施する。

・児童・生徒に事前事後アンケートを実施し、分析を行う。

・児童・生徒の演奏を録音し、周波数分析を行う。